

星期日日语

中央电视台电视教育节目用书

中央电视台电视教育部编

中国广播电视出版社出版

日曜日の たのしい 日本語

一九八五年第一期



中央电视台电视教育节目用书

星期日日语

日曜日のたのしい日本語

1985—1（总9）

中央电视台电视教育部编

中国广播电视出版社

星期日日语85—1

〈总第9期〉

中央电视台电教部编

中国广播电视出版社出版

外文印刷厂印刷

新华书店北京发行所发行

1985年3月第1版 1985年3月第1次印刷

787×1092毫米 16开 印张3.5 字数896(千字) 印数1—30,000册

统一书号: 9236·046 定价: 0.63元

目 录

1. 三年たって、恋（三年后的恋情）……………（1）
2. イシダイしまごろう（石鲷鱼五郎）……………（16）
3. 新時代の鉄づくり（钢铁工业的新时代）……………（23）
4. 小さな駅の物語り（一个家庭小车站）……………（30）
5. 400万人の通勤輸送（400万人的乘车高峰）……………（39）
6. おとぎのへや—いわじいさん（童话集——石头爷爷）……………（45）
7. 日本の歌—北国の春（日本歌曲—北国之春）……………（50）

《星期日日语》每星期日下午三时起由中央电视台第一套节目播送

三年たって、恋

(東ヶ丘高校・全景)

礼子の声：高校3年の時、わたしは日本史の菊地先生に恋をしました。

(同教室)

大助：さて、このころの蘭学というのは、たいていは藩や幕府に仕える御用学者が多かったんだ。だから、いくら蘭学が盛んになったといっても、え、結局は藩や幕府の保護や監視のもとにあったわけだなあ。そんな中でシーボルト②の弟子であった高野長英、高野長英という名前をきいたことあるか。《はい》うん、その高野長英や田原藩の家老をしていた渡辺華山、こういう人達がつくっていた蘭学者のグループ、尚歯会というのだけはすこし違っていた。どんなふうに違っていたのか。ここが大事なんだ。

礼子の声：先生が独身であることは生徒達はみんな知ってました。あこがれていた人も大勢いました（が）、わたしは本気で恋をしたんです。3年前のことです。

タイトル・「三年たって、恋」

(東ヶ丘高校・教室)

大助：このころの蘭学者というのは、たいてい幕府や藩に仕えていた。だから、えー、幕府や藩の保護や監視のもとにあったわけだな。おい安井、ちゃんときいてろ。《はい》うん、いいか。そんな中でも、日本を追放されたシーボルトの弟子であった高野長英、それに渡辺華山、渡辺華山（と）というのは絵かきとしても有名だな。

(同・別の教室)

英子：Walking a street I met her. まちを歩いていた時、あたしは彼女に会いました。そしてこれは、Seeing a lion he ran away. ライオンにあったので彼は逃げだしました。上の文章は、まちを歩いていたときという時を表し、下の文章はライオンにあったのでという理由を表します。

(同・廊下)

和夫：ホッ、それ……。

大助：はっ。

和夫：なぜ。

大助：いい、ア、アレルギー④ですよ。

和夫：あっ、花粉かなんかで。

大助：いや、僕の場合はある種の化粧品が原因で。

和夫：あーらら、大変だあね。

大助：今、その廊下ですれちがったこの女学生の中のだれかがつけてたんですよ、こっすり。

英子：入口で立ち話なさらないで。

和夫：ああ、今井先生はまだまだそんなにお太りになってませんよ。

英子：まあ、人が気にしてることを露骨におっしゃるわね。そういうデリカシー⑤のない方にうちの生徒は音楽を教わっているのね。

大助：ハハハ……。

和夫：失礼いたしました。はい、どうぞ。

英子：あ、今日、お寄りになる。

大助：い、行きます。

(今井家)

大助：うーん。うん。

英子：宇高さん、だいふ花ほめてる。あの様子じゃお母さんの気に入られそうね。

大助：お母さま、ずいぶん老けられましたねえ。僕が学生時代ここへ遊びに来たころはちやうど今のの。

英子：ちやうど、今のあたしと同じように若々しかったと、言ってみたかったのかなあ。

大助：ウンいいえ。

英子：母は主人が亡くなってから、急に老けたわ。

大助：ショックだったんですねえ、息子さんを亡くして。先輩まだ若かったもの。

英子：でも来年もう、七回忌が来んのよ。

大助：そうですねえ。

英子：あらら。そこ、打っていいのかな。

大助：え。あっ。

英子：いいわよ。いいわよ。打ちなおして。

大助：いや、いいですよ。打ちなおしは上達しないんですから。

英子：その気持ちは、大切ね。

大助：あー、あああああ。

英子：ウッフッフ、あたしがはじめて対で負かした時の主人の顔、今でもはっきり思い出すわ。

大助：先輩負けず嫌いでしたからねえ。

英子：ウフン、ほんとにくやしそうだった。

大助：うーん、そこはだめか。

英子：ねえ、あれ本になさんの。

大助：えっ。

英子：「渡辺華山の研究」、雑誌の方の連載もう終わったみたいね。

大助：ああ、読んでてくださったんですか。

英子：ウフン、あんまり忠実な読者じゃないけど。

大助：まあ、なんとか出版できそうです。今少し手を入れてる⑥んです。

英子：ふうん、まあ学校のことやりながら、あいだけ研究すんの、大変だったでしょうね。

大助：そりゃまあ、ひとり身だったからじゃないですか。

英子：そうね。まあ、それは言えるかもしれないわね。

大助：うん、これどうかな。

英子：うん。うーん。あれ、花ぼめ終わったな。いいわよ、そこで。ねえ。菊地さん。

大助：はい。

英子：あたしの受け持ちだったあの、小泉礼子って生徒のこと覚えてるわね。

大助：ああ、3年ぐらい前に卒業した子でしょう。

英子：あれくらいあなた夢中だった生徒も珍しいわ。

大助：いやあ、しかしまあ、卒業すればみんなと同じ、熱も下がってしまっ

英子：ゆうべ、電話してきたの。

大助：え。

英子：あら、菊地さんのほうへはまだ。

大助：当たり前でしょう。

(菊地家・玄関)

大助：ただいま。

大助の母：あっ、お帰り。

大助：だあれ。

大助の母：あ、広次が来てるの。若い娘さんというしょに。

大助：ほーん、ガールフレンドか。

大助の母：うん、そうらしいよ。

(同・居間)

大助：お帰り。

広次：ね兄さん、この人覚えてる。

大助：うん。

礼子：お久しぶりでございます。

大助：ああ、アンいやどうも。

広次：いや、お父さんがね、うちのゴルフ場の会員で、礼子さん時々お父さんと来るんだ。

大助：ゴ、ゴルフ。

広次：うん、決まってるじゃないか。

大助：フン。う、うまいの。

礼子：いえ、はじめたばかりですから。

広次：僕が教えてるんだ。

礼子：広次さんが先生の弟さんだとは知らなかったんです、はじめ。

広次：ハハハ、いや、兄貴はさあ、ゴルフなんてもうまるっきり縁がないもんな。ね、兄さん。弟にプロゴルファーがいるなんてっても、だれも信じてくれないだろう。

大助：おまえ、……プロだったのか。

広次：あ。いやあ、あの、いずれなる。

大助：なんだよ。

大助の母：お腹はいいのね。

大助：ああ、今、今井先生んとここでごちそうになってきたから。

大助の母：悪いわね、いつも。

大助：広次、《うん》お前、今日、泊まっていくのか。

広次：いや、宿舎に帰る。あしたも早朝から練習をするんだ。

大助：あ、お前もがんばってるってとこだな。

広次：うん。まあ、早くプロになって、今までの兄貴の苦勞に報いてやりたいと思って。

大助：おいおい（おまえ）、ガールフレンドがそばにいるからって、ちょっとかっこいいこと言い過ぎるんじゃないか⑨、おまえ。

広次：いや、それもあるかな。（いや）だけど、ん、本心でもあるぜ。

大助：はい、期待してる。がんばってくれ。

広次：うん。

大助：どうぞ、ごゆっくり。おれ、ちょっと。

広次：なに、勉強。

大助：うん。

大助の母：ほんとに無愛想ねあの子は。生徒さん達の評判どうなのかしら。

礼子：あ、とってもいい先生でした。

大助の母：そう、この子とだいぶ違うでしょう。父親が小さい時亡くなったから苦勞が多くてね。大学もアルバイトしながら出たのよ。

広次：ま、そこいくと僕はまるっきり苦勞なし、兄貴が父親がわりをやってくれたからねえ。

大助の母：あんな調子だから女の人にも縁がなくてね。

広次：いや、ほんとにはね、何度か縁談だって持ち込まれたんだ。だけど、いつも母さんが乗り気じゃないんで⑩、それで……。

大助の母：広次。

広次：いつまでもね、兄貴を独占していたいらしいんだ。

大助の母：なにを言うの、あんたは。

広次：なんだよ、母さん。冗談だよ、冗談。

大助の母：冗談なりませんよ、そんな話は。礼子さんだって本気にするじゃないの。

礼子：いいえ。

広次：ま、つまり兄貴が独身なのは、兄貴の勝手でしょってとこかな。

大助の母：あら、あの子、お茶も飲まないで。

（同・大助の部屋）

大助：どうも集中できんなあ。

（東ヶ丘高校・教室）

礼子：先生。

大助：はい。

礼子：消しゴム落としました。拾っていいですか。

大助：ああ、いいよ。

礼子：すいません、先生。

大助：あ、いや。はい。

(同・廊下)

礼子：先生。

大助：うん。

礼子：お誕生日おめでとうございます。

大助：お、どうも。

(今井家)

英子：困ってるわけ。

大助：そうなんです。まあ、これまでも生徒から好意を持たれたことは何回かあるんですが、あの子はちょっと度が過ぎて⑩ますねえ。

英子：菊地さんではうまく処理できそうもないのね。

大助：とてもだめです。で、まあ担任の先生にお願いするしかないと思って、今井先生ならあの子の心を傷つけないでなんとかうまく話して下さるだろうと。

英子：そうねえ。あたしが話したほうがよさそうね。

大助：お願いします。

子英：でも、菊地さん、独身だから、まだまだ当分は生徒の擬似恋愛の対象になりそうねえ。

大助：からかわないでくださいよ。

英子：じゃ、碁打ちます。

大助：あ、やりましょ。やりましょ。(さ)あ、今日はこないだの敵討ち。

英子：まあ、お気の毒さま、返り討ちね。

(菊地家・大助の部屋)

大助：……きれいになったなあ。はい。

礼子：先生、お茶を持って来ました。あの、入ってもいいですか。

大助：どうぞ。

礼子：お母さまがかたづけもの(を)なさってたから。

大助：あ、ありがとう。

礼子：先生はお茶が好きなんですってね。

大助：ああ、あ。あちっ!

礼子：あ、そんなに熱かったですか。

大助：いや、ぼ、ぼ、僕は猫舌⑪だから……。

礼子：いいお部屋だわ。

大助：あ、いや、あ。あの、あ、お茶どうもありがとう、うん。

礼子：先生はあたしのことを覚えていて下さったんですね。それに、あたしを見てもと驚くかと。

大助：今井先生んところへ電話したろ、ゆうべ。

礼子：あ、あたしの名前聞いたばかりだったんですか。

大助：ああ、正直言うと、名前を聞くまでどうも忘れていたようだ……。

礼子：そうだろうと思ってました。

大助：弟が、でも、君の友達だったとはねえ。

礼子：ええ。広次さんって率直で明るくて、あたし……。

大助：うん、まあとにかく、よろしくたのむよ。

(同・居間)

礼子：あ、これ。

大助の母：どうもありがとう。

広次：あれ。なんだ、少し話ぐらいしてくると思ったのに。

礼子：先生お仕事中ですもん。

広次：いや、それにしてもだめよ、昔の教え子に会ったんだ。あいきょうでも今なにしてるとか、その仕事はおもしろいとかなんとかこうきくもんだろう。それもしないの。

礼子：ええ。

広次：あ、あきれた。いや、ひょっとすると兄貴は本心から女嫌いなのかなあ。……さて、そろそろ帰るかな。礼子さんうちまで送るよ。

礼子：え。

大助の母：帰るの。

広次：ああ。

大助の母：今度はいつ来るの。

広次：うん、12月かな。

礼子：おじゃましました。

(同・大助の部屋)

礼子：失礼します。

広次：じゃね。

大助の母：さようなら。

(同・居間)

大助の母：なにしてんの。

大助：いや、別に。

大助の母：広次達あんたが仕事中だから、じゃましちゃ悪いって、あいさつないで帰ったわよ。

大助：ううん、あ、母さん。

大助の母：ん。

大助：お茶、ください。

大助の母：自分の茶わん持って来た。

大助：持って来ないよ、そんなもの。い、いよお茶は、もう。

大助の母：なにうろうろしてんの。

大助：別に。

大助の母：お茶ほんとにいらないの。

大助：う、うんじゃ飲むよ。母さん、あの二人、仲よさそうだね。

大助の母：そうね。あんたがあの娘さんの先生だったんで、よけい仲よくなったみたいね。どうしたの。お茶。

大助：もう、お茶いいよ。

大助の母：はっきりなさいよ。

大助：いらないうって言うてるのに。仕事してくるよ。

大助の母：変な子。

（同・大助の部屋）

大助：まさか、おまえ。

（東ヶ丘高校・職員室）

大助：なに。

和夫：いや、体の調子でも悪いんじゃないかなあと思って。

大助：いや別に。

和夫：……さて、今日は土曜日ですねえ。そろそろ帰りますか。

（今井家）

英子：少し前に帰って来たところなの。えっ、今から。ああ、じゃ、近くにいのね。

あ、じゃ、いらっしやい。待ってるわ、小泉さん。

（東ヶ丘高校・教室）

礼子：先生。

英子：なんで呼ばれたか見当つく、小泉さん。ハー、菊地先生がねえ、とても困ってらっしゃるわ。

礼子：困る。

英子：まあ、手紙ぐらいならがまんできしょうけどね。生徒にあとをつけられたり、お宅の前で待ち伏せされたりしたら、そりゃだれだって困るわ。

礼子：あたし、ほんとに菊地先生が好きなんです。

英子：小泉さん、成績もひどく落ちて来たでしょう。大学受験もうすぐよ。浪人したくなかったら。

礼子：好きなんです、菊地先生が。

英子：だったら少しは先生の立場も考えてあげなさい。あなたとのことで菊地先生に变なうわさがたったら、先生は即刻くびよ。

礼子：くび。

英子：くびにしたくないでしょう、菊地先生を。あなたがね、ほんとに菊地先生を好きだったら、あと3年くらいお待ちなさい。

礼子：3年。

英子：3年たってまだ心が変わらなかったら、その時はあたしも応援するわ、あなたの恋を。

礼子：とっても恥ずかしかったけど、思いきって菊地先生のお宅へ伺たんです。

（今井家）

英子：あら、菊地先生、なんにもおっしゃらなかった。

礼子：それは、先生が3年前と同じ、あたしには無関心だからです。それに、あたしのこと弟さんのガールフレンドだと思われたろうし。……あたしがゴルフを教わっている人が先生の弟さんだと知って、とってもびっくりしました。なんていう偶然だろうかと思って。それで先生のお宅へ連れてってもらったんです。

英子：で、その弟さんのほうはあなたのことどう思ってるの。

礼子：さあ、ガールフレンドの一人ぐらいには考えてるかもしれないけど、恋人までは。

英子：でも、それは、あなたの判断でしょ。

礼子：ええ、でも間違っていないと思います。

礼子：つまりあなたは弟さんを利用して、菊地先生に会いに行ったのよね。

英子：そういわれてもしかたがありません。でも先生、3年たったんです。この3年間、あたしの心の中にはいつも菊地先生がいました。で、お会いして自分自身の気持ちをはっきりとさせたかったんです。

英子：それで。

礼子：菊地先生のこと、今でも好きです。はっきり好きだってわかりました。

英子：あ、つまり、あたくしに約束を守れて言いに来たのね。うーん、あっ、こっち来ない。このいす楽よ。

礼子：あの、別に応援してくださらなくてもけっこうなんです。それじゃ、先生があまりにかわいそうですから。

英子：かわいそうって、あたしが。

礼子：ただ、妨害だけはしないでください。

英子：（ね）、かわいそうってどういうこと。

礼子：あたし、やっとわかったんです。3年前も今も、先生は菊地先生のことお好きなんですね。

英子：小泉さん。

礼子：違いますか、先生。

英子：……大違いもいいとこよ⑩。

礼子：だったら訂正します。

英子：3年前のこと、あれあたしがあなたの恋のじゃまをしたと思ってるの。

礼子：いいえ。あれはやっぱり菊地先生が頼んだことだろうとは思いますが。だけど、先生の心の中……すいません。やめます。とにかくあたし、菊地先生にお会いしましたからそのことを。どうもおじゃましました。

英子：小泉さん、ちょっと待って、小泉さん。

（喫茶店）

ウェイター：いらっしゃいませ。いらっしゃいませ。

大助：ここでいいかな。はー、あー。

礼子：お宅ではあんなに無愛想だったんで、今日もお茶になんか誘ってくださらないのかと。

大助：そんなに無愛想だった。

礼子：ええ。

大助：全然気がつかなかった……。

礼子：あ、よかった。

大助：……あそこの本屋はよく行くの。

礼子：ええ、たまにですけど。

大助: ん、いや僕も来年ね、本を出すかもしれないんだ。

礼子: え、なんの本ですか。

大助: いや歴史の本だよ。「渡辺華山の研究」。

礼子: わあ。じゃ、先生の本が本屋さんに並ぶんですね。

大助: まあ、あんまり売れそうもないけどね。

礼子: すばらしいわ。あたし知ってる人にみんな買うように言います。あ、そうだわ。あの卒業生にも呼びかけて。

大助: やめてくれよ、君。僕の本は漫画や小説じゃないんだよ。だれが読んでもおもしろいってわけにはいかないんだ。興味のある人だけが読む本なんだ。んー、義理に買って、んー、押し入れのすみかなんかほっぽっとかいたらちっともうれしかないよ。

礼子: すいません。

大助: いや、そりゃ君の好意はうれしいよ。まあ、そりゃね。本だって売れないより、売れたほうがいいんだ。

ウエイトレ: いらっしゃいませ。

大助: あ、コーヒー。君は。

礼子: アメリカンください。あの。

大助: あはっ、あ、どうぞ、君から。

礼子: いえ、先生どうぞ。

大助: なにを話しようとしたの。

礼子: あのう。

大助: なに。

礼子: 先生はこれから先もずっとあの学校に。

大助: どういうこと、それ。

礼子: ほかの学校に移るなんていうことは。

大助: ああ、いや今んところやっぱりあの東ヶ丘高校が一番居心地がいいね。それに、まあ、同僚の先生とも仲よくやってゆけるしな。

礼子: 今井先生もいらっしゃるし。

大助: うん、僕の碁敵だ。

礼子: 碁敵。

大助: 今井先生ね。碁がものすごく強いんだよ。

礼子: あつ、そうだったんですか。

大助: そう、あの先生を負かすことができるようになったら、あの高校やめてもいいかなあ。あ、……こりゃ冗談だ。最近広次と会ってる。

礼子: ええ、この前の日曜日に会いました。父といっしょにゴルフ行った時(に)。

大助: そう、あいつと気が合う。

礼子: 合います。とっても親切に教えてくださるんで、あたしのゴルフの腕急速に上がりました。

大助: うん。

礼子: 教え方がうまいんですね。きっと頭がいいからなんだわ。

大助：そうね。

礼子：来年プロテスト⑩受けるって言ってたけど、合格するといいですね。

大助：そうだねえ。

礼子：プロゴルファーってすてきだわ。早く青木みたいになってほしい。

大助：青木。

ウエイトレス：お待ちどおさまでした。

大助：ああ、どうもありがと。あつっ、あつ……。

礼子：あ、先生猫舌じゃなかったんですか。

大助：はあ、そうですよ……。

(菊地家・居間)

大助：あのう、菊地をお願いします。は、兄です。あ、コースへ出てる。あっ、それあの、いつごろそ……、あはあ、そうですか。はい、あ、いやあどうもすみませんでした。

大助の母：あら、帰ってたの。

大助：母さん、あの、あの広次いつ帰って来るって。

大助の母：えーとね。12月に帰って来るって。

大助：あは、そう。

大助の母：広次になんか用なの。

大助：いや、いいや。電話かけて外で会うから。

大助の母：珍しいわね。広次に用があるなんて。

大助：母さん、おれ、結婚するかもしれないよ。

大助の母：だれと。

大助：母さん、僕が選んだ人、反対しないよね。

大助の母：うん、もちろん。うん、あたしあんたを信じてるからね。変な女の人は選ばないって。

大助：とにかく結婚する気になって来てるんだ。

大助の母：ね、年上の人はやめなさいよ。

大助：あ、ああ。

大助の母：と言ってあんまり若すぎるのもね。そう、陰気な人はいやあね。

大助：そうわ。

大助の母：うん、このごろ背の高い女の人多いけど、背の高い人やめたほうがいいわよ。

案外体が弱いから。やせた人はね、また子供を産む時なんか大変だしね。ほんとうは結婚なんかしないのよね、大助さん。

大助：母さん、今度は本気だよ。とにかく僕の選んだ人絶対反対させないからね。

(東ヶ丘高校・教室)

(同・職員室)

大助：はくしょん……。

(同・廊下)

大助：はくしょん、ハー……。

校長：菊地先生。

大助：は。

校長：おめでとうございます。

大助：な、なんでしょうか、校長先生。

校長：（いや）今井先生から聞きましたよ。華山の研究を本にまとめられたそうですね。

大助：ああ、来年出版の運びになりました。

校長：ハーいや、おめでとう。それにです。立派な本を出す先生を持つことは、我校の誇りですよ。

大助：いや、そんなおおげさな、校長。

校長：いやいや、（もう）けんそんなさなくてけっこう。え、いずれ出版記念会なんでも盛大に。ね。

事務員：校長先生。

校長：あ。

事務員：理事長からお電話です。

校長：ああ、そう。

事務員：はい。

校長：そいじゃ、また、のちほど。

大助：ハー。

和夫：菊地先生。

大助：は。

和夫：いやあ、正直言って、守備範囲の広さにゃ驚きましたよ。

大助：守備範囲。

和夫：ええ、専門は歴史でしょ。なんか物理学のほうもおやりになってるんですね。

大助：物理学。

和夫：ええ。あの、プワーと、火山の研究を本にまとめられたとか。

大助：かざんの、あ、火の山、火山、ウワハハハ……。

（今井家）

英子：菊地さんが職員室で笑ってんの見た時、あたしなんだか様子がおかしいなあって感じたの。

大助：そうですか。

英子：あたしの思い過ごしかしら。

大助：いえ、やっぱり、おかしいんです、僕ちょっと。だから今日は久し振りに碁を打ちに来たんですよ。

英子：ほんとのこと言うとね、きかなくてもわかってるの。恋してるんでしょ、小泉礼子に。ハ、やっぱりね。3年前にはなんとも思ってた子なのに。

大助：突然好きになったんです。

英子：こういうことは理屈抜き^⑩なのかなあ。

大助：昔より確かにきれいになった。でも、それじゃないんです。弟のガールフレンドとしてうちへ現れたのがいけなかったんですね。

英子：ほんとに理屈に合わないわね。

大助：我ながら情けないと思ってますよ。弟の恋人なんだからあきらめろ、あきらめなくちゃいけない……思えば思うほど好きになっていくんです。

英子：びっくりした。

大助：そうでしょうね。

英子：ううん、そういうことじゃなくて、菊地さんがよろいをすっかり脱いであたしの前にいるってこと。

大助：よ、よろい。

英子：あたしの知ってる菊地さんは、いつもよろいを着てたっていう感じがするのよ。かまえて、いつも敵に備えてるって感じ。まあ、菊地さんの性格によるのかもしれないし、若い男性が女子校に勤めるっていうことから起こる防衛本能があったのかもしれないけど。

大助：重いよろいを着てましたかね。

英子：あたしに対してもね。あたしも着てたから、それ同じかしら。

大助：今井先生は、そう、きれいだから。

英子：そういうことが平気で言えるようになったのね。でもよろいのこと、思い当たるでしょ。

大助：は、ええ。

英子：安心していいわ。あの子今でもあなたのことを好きよ。

大助：どうしてわかるんですか。そんなことが。

英子：うん、あたしにそう言ったから、3年前と変わらないって。

大助：僕にはそんなこと言いませんでしたよ。

英子：そ（れは）あなたが聞かなかったからでしょ。

大助：でも、彼女は弟の恋人なんです。

英子：へ、だから、言ったでしょう。彼女の本心は弟さんにではなくてあなたにあるって。

大助：弟が彼女を好きなんですよ。ぼくは弟の彼女を横取りするようなことはできません。電話をかけて、弟に彼女がどのくらい好きかってきいたんです。そしたら、とても好きだって言うじゃありませんか。その率直な言葉聞いたら僕はもう、自分の気持ちなんか話せなくなりました（よ）。

英子：どうしたらいいのかしら。

大助：僕の恋は遅すぎたんです。

英子：……早すぎたら学校くびんってたわ。

大助：そうか。それも困ったでしょうね。

英子：フーン、ほんとにどうしたらいいのかしらねえ。

大助：どうしたらいいかわからないから、悩んでるんじゃないですか。

英子：どうしたらいいのかなあ……。ちょっと碁を打ちましょ、ね。

大助：あ、いいですよ。でも、僕は今日負けますよ。

英子：そんなことわからないじゃない。

大助：いえ、暮は心の乱れが直接勝負につながってくるんです。こわいもんです。あのう、四目置かせてください。

英子：はい、あなたってばかみたいにやさしい人なのね。ああ、ちょっとそこまずいと思うけど。

大助：あ、そうか。

(同)

英子：電話でいいわね。菊地先生はあなたのこと好きになってる。ほんとよ。そう。あたしが聞き出したの。ところがね、ここが大切なんだけど、あなたのことを弟さんの恋人だと思い込んでるわ。だから、あなたがすぐしなきゃいけないことは、弟さんに真実を話すことよ。うん、もちろんあたしも助けるわ。しっかりね、小泉さん。

(レストラン)

礼子：ごめんなさい、広次さん。

広次：ひどいよ。

礼子：あたし、高校の時から菊地先生が好きだったんです。そして今も。ごめんなさい。

広次：兄貴と会いたいために、僕とつきあったのか。

礼子：でも、あなたが菊地先生の弟さんだってことは知らなかったんです。ごめんなさい。どうしても許してくれないの。ハーほんとにごめんなさい……。広次さん。

広次：ああ、ともかく許せない。いいか礼子さん、上等のビフテキと、うーんワインを注文しちゃうからな……。

(菊地家・大助の部屋)

大助の母：入るわよ。

大助：あ。

大助の母：出かけるんでしょう。

大助：うん、うん、もう時間だよ。あれ、降って来たよ。タイミングがいいなあ、クリスマスに雪なんて。

大助の母：積もると帰りが大変だわよ。レストラン、ゴルフ場のそばだって言ってたわね。

大助：あの話忘れて。結婚はたぶん広次のほうが先になりそうだ。今日も広次と礼子さん二人からの招待なんだよ。どうせそんな話なんじゃないのかな。——

大助の母：そうかしら。

大助：本格的になってきたよ。

(今井家)

和夫：クリスマスに打つ暮なんてしゃれてますよね。

英子：そうね。

和夫：菊地さんも来ればよかったのになあ。あの人もどうせひとりもんだ。クリスマスだなあなんて思うと、かえって間が持たないんじゃないの。

英子：用事ができたって言ってたわ。

和夫：へえ、あー一生に一度でいいから、こんなクリスマスの夜にしゃれたレストランなどで、美しい女性とロマンチックな時を過ごしてみたいもんですな。